

目 次

はじめに

研究成果報告

- ・浅水深域における魚類資源量調査システムの開発
吉川夏樹 客員研究員／新潟大学農学部
石村謙太・佐藤太郎／新潟大学農学部・大学院自然科学研究科 …… 4
- ・新潟市域湖沼における水生・湿生植物相
金田風花 新潟大学教育学部
志賀 隆 客員研究員／新潟大学教育学部 …… 31
- ・じゅんさい池の現状把握と保全の試み
井上信夫 協力研究員／生物多様性保全ネットワーク新潟 …… 58
- ・赤塚地域における地域教育～潟を中心とした地域教育の事例として～
太田和宏 協力研究員／赤塚中学校地域教育コーディネーター …… 68
- ・潟の伝承・書籍調査報告
高橋郁丸 協力研究員／新潟県民俗学会 …… 85

特別寄稿

- ・佐潟でのヨシ刈りによるヨシの成長および「ど」の復元に伴う植生の変化について
久原泰雅／新潟県立植物園 …… 92
- ・日本一のハクチョウ越冬地～越後平野の潟と田んぼ
—新潟県水鳥湖沼ネットワークの連携調査—
佐藤安男／新潟県水鳥湖沼ネットワーク／水の駅「ビュー福島潟」
…… 103
- ・新潟砂丘南西端地域の地形
澤口晋一／新潟国際情報大学国際学部 …… 115

参考資料

- ・平成28年度組織体制について …… 138
- ・潟環境研究所定例会議概要
- ・潟環境研究所ニュースレター（第5号、第6号）
- ・潟マップ

【表紙写真】 雁ばり隊と水の駅「ビュー福島潟」

この写真は、「雁ばり隊」が、水の駅「ビュー福島潟」の大熊孝名誉館長と一緒にいったイベントの中で、潟舟に乗っている様子です。

雁ばり隊は、小学3年～6年生をメンバーとして、1年を通して生き物観察やキャンプなどのさまざまな活動を行っています。

また、福島潟の自然と文化の情報発信施設として、1997年に開館し今年で20周年を迎える水の駅「ビュー福島潟」が写真の右手に写っていますが、高さ29mの屋上からは、潟と越後平野を一望でき、館内では潟の動植物や歴史の展示、潟の中のライブ映像を楽しむことができます。



(提供：水の駅「ビュー福島潟」)

はじめに

本市は、明治期以降、大河津分水などの放水路と排水機場の開発によって日本有数の穀倉地帯となり、本州日本海側初の政令指定都市として発展してきました。かつて無数にあった潟群は、その多くが水田化されましたが、いまでも「里潟」として人と潟との関係性が引き継がれる16の潟群が残されており、毎年ハクチョウやヒシクイなどの渡り鳥が飛来します。このような類まれなる潟環境を調査・研究する活動も4年目を迎えました。

当研究所の調査・研究テーマは、潟の自然環境をはじめ、歴史、文化、生業及び民俗など多岐に渡っています。振り返れば、調査・研究活動は、学識経験者、様々な経験を持つ地域住民及び複数部署の市の職員が参画するなど、多様な人々が関わりながら、横断的な展開ができたおかげで、当研究所の特徴である総合的、かつ、中立的な視点からの調査・研究活動が可能であったと考えております。

本冊は、各研究員の調査・研究成果を発表するものとして、今回で3冊目の発刊となります。これまでも、潟の水質改善、潟の水生植物相、魚類や潟の暮らし文化に関わるものなど、各研究員が、精力的に調査・研究を行い、素晴らしい成果をあげてくれていると思います。平成28年度には、高橋郁丸氏を協力研究員に加え、潟の伝説・伝承にまつわる調査をしていただくことで、さらに研究所の活動の幅が広がったと感じています。

また、特別寄稿として、最近注目を集めている砂丘に関して、澤口晋一先生（新潟国際情報大学国際学部教授）から「新潟砂丘南西端地域における地形について」をご寄稿いただきました。澤口先生には、平成29年度から当研究所の客員研究員として調査・研究活動にご協力いただいております。

このほかにも、佐藤安男氏（水の駅「ビュー福島潟」館長）から「日本一のハクチョウ越冬地～越後平野の潟と田んぼ」、久原泰雅氏（新潟県立植物園）から「佐潟でのヨシ刈りによるヨシの成長および「ど」の復元に伴う植生の変化について」をご寄稿いただきました。このように、今回の研究成果報告書も大変充実した内容に仕上げることができたと思います。

多くの市民が本市全域にわたってハクチョウなどが生息する特異な共生関係を有していることに気づき、21世紀の自然と人との関係のあり方として、この共生関係が再評価される時代になっていると思います。この理解がさらに深化・発展することを願います。

なお、当研究所では、平成26年度の設立から平成28年度までの3年間の活動内容をまとめた「新潟市潟環境研究所活動報告書」も発刊しました。この活動報告書は、活動報告や「潟」に関する調査や活動の報告のほか、潟の歴史や現状を踏まえ、豊かな自然環境の維持や交流人口の拡大などの効果を期待して、潟の生物多様性の保全や里潟ブランドの確立、潟文化の魅力発信などの取り組みを、自然と共生する大都市「ラムサール条約都市・新潟」としての提言“潟と人との未来へのメッセージ”と題し、公表したものです。詳しくは市ホームページや市内の図書館での閲覧が可能ですので、こちらもぜひご覧ください。

本市の潟群が「賢明な利用」のもと保全され、よりよい環境で市民の宝として次世代に継承されることを願いながら、これからも、多くの市民が身近な潟を単に知るだけではなく、残された潟群を俯瞰的に認識し、潟と人との関係の変化を知る機会を提供していきたいと思います。

平成29年6月



新潟市潟環境研究所
所長 大熊 孝